

主日礼拝説教「平和のための鍛錬」 予稿

日本基督教団石神井教会 2026年8月2日

【旧約聖書日課】申命記 10章12節～11章1節

10¹²イスラエルよ。今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。ただ、あなたの神、主を畏れてそのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、¹³わたしが今日あなたに命じる主の戒めと掟を守って、あなたが幸いを得ることではないか。¹⁴見よ、天とその天の天も、地と地にあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。¹⁵主はあなたの先祖に心引かれて彼らを愛し、子孫であるあなたたちをすべての民の中から選んで、今日のようにしてくださった。¹⁶心の包皮を切り捨てよ。二度とかたくなになってはならない。¹⁷あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄略を取ることをせず、¹⁸孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。¹⁹あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。²⁰あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主につき従ってその御名によって誓いなさい。²¹この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である。²²あなたの先祖は七十人でエジプトに下ったが、今や、あなたの神、主はあなたを天の星のように数多くされた。
11¹あなたは、あなたの神、主を愛し、その命令、掟、法および戒めを常に守りなさい。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙 12章3～13節

³あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。⁴あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。⁵また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。

「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。

主から懲らしめられても、

力を落としてはいけない。

⁶なぜなら、主は愛する者を鍛え、

子として受け入れる者を皆、

鞭打たれるからである。」

⁷あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。⁸もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。⁹更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。¹⁰肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。¹¹およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。¹²だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい。¹³また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章42～50節

⁴²「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。⁴³もし片方の手があるあなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。† ⁴⁵もし片方の足があるあなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。† ⁴⁷もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。⁴⁸地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。⁴⁹人は皆、火で塩味を付けられる。⁵⁰塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」

互いに平和に過ごす【こども説教のために】

わたしたちの国では、8月には平和を願う特別な祈りがささげられます。かつて、わたしたちの国が戦争で多くの命を失わせたことを反省し、平和を実現する国であろうとする願いを確かめるためです。

わたしたちの教会もまた、8月を平和のために祈るときとしてきました。8月の礼拝では、「平和」をテーマにした讃美歌を歌い、「平和の祈り」を共に祈り、「平和の挨拶」を交します。

もちろん、教会は、8月に限らず、いつも平和のために祈っています。互いのために「平和」を告げ合います。わたしたちの教会が8月や特別な礼拝のときだけ交わす「平和の挨拶」は、多くの教会が毎週の礼拝で行っていることです。

そもそも、主イエスが弟子たちを集めてくださったのも、使徒たちの教会が世界中に出て行ってそれぞれの地で信じる者たちを集めたのも、「平和」のためでした。今日の福音書で、主イエスは「互いに平和に過ごしなさい」とお教えですが、「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ 5:9）ともおっしゃいました。

だからこそ、使徒たちの教会は、何よりも「平和」であることに心砕いて、共に歩んだのです。使徒パウロは、「キリストの平和があるあなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです」（コロ 3:15）と教えました。

主イエスがお教えくださったのは、自分一人の「平和」ではありません。わたしたち皆が「平和」であるための道です。自分にとって大切な、大きな存在が「平和」であればよい、というわけではありません。自分からは遠く、小さな者にも「平和」がもたらされることを願い、そのために一歩踏み出して行くことを、主イエスはお教えくださっているのです。

小さな者の一人を

先週火曜日、熊本で再び大地震が発生しました。すでに、多くの被害が報道されており、亡くなられた方も数十人に及ぶようです。10年前の大地震からようやく復興しようとしている中での再びの大災害に、どれだけ多くの方々が落胆されていることかと思います。わたしたちの教会の交わりの中には、熊本出身の方も幾人かいらっしゃいます。直接でなくても、皆さんの中に熊本と縁のある人と関わられているという方は少なくないでしょう。ご関係の方の安否や被害の様子をお聞かせいただくこともあるかもしれません。まだどうなるか分かりませんが、教会として今後の支援などに関わらせていただくこともあるかもしれません。

6月には南米ベネズエラでも大きな地震がありました。多くの基準を満たさない建物が倒壊している様子はニュースでも多少報じられましたが、被害の大きさにもかかわらず、日本での関心は低いようです。日本基督教団ではこの地震の被災者救援募金の呼びかけを始めていますが、わたしたちの教会ではまだ対応できていません。

自然災害は避けられないことかもしれませんが、戦争は決して避けられないことではありません。わたしたちは、今年も8月を迎え、「平和」実現への思いを新たにしようとしています。とは言え、わたしたちは、現に今もこの地球上で行われている戦争の現実、に、どれほど関心を寄せ、その終結のために祈り、また行動することができているかと言えば、怪しいのです。すでに数年に及び、何万人という死者が数えられている戦争・紛争によって町や施設が破壊される映像を、わたしたちは連日、見せられています。それらの当事国のいくつかには、わたしたちの国からも資金が投じられていると言います。にもかかわらず、わたしたちは、どこかそれを他人事のように聞き流してしまっているのです。

それが、人間の本性なのかもしれません。根っからの「自分ファースト」なのです。自分のことが第一であり、自分が直接関わるのが優先であり、自分の手の届くテリトリーから離れれば離れるほど関心は薄れ、視野に入っても小さくなっていくのです。

それは、ある意味では仕方の無いことです。わたしたちは、全知全能者ではないからです。神は、わたしたちの隠れたところまでご存じのお方です。すべての者、全被造物を、等しくご自分の視野に収め、偏り見ることなく扱ってくださるはずです。けれども、わたしたちは、神ではないのです。

それでも、わたしたちは、開き直るわけではありません。主イエスは、わたしたちが「**小さな者の一人**」をないがしろにしないようにとお教えなのです。そうしてこそ、「**互いに平和に過ごす**」ことになる、とおっしゃるのです。

自分自身の内に塩を持つ

「互いに平和に過ごしなさい」とおっしゃる主イエスは、「**自分自身の内に塩を持ちなさい**」ともおっしゃいました。もう少し正確に言えば、主イエスは、二つのことを並べ言われたのではなく、一つのことをおっしゃったのです、「あなたがたは、自分たち自身の内では塩を保ち、そして、互いに相手の内で平和を為しなさい」と。

わたしたちには、「塩」が必要です。「塩」は単に味付けのためだけでなく、生きていくのに必要なものでもあるのです。「塩」がなければ、味付けだけでなく、命そのものが損なわれる恐れさえ生じます。もちろん、過剰でもいけません、適切な「塩」は、必要なものです。

もちろん、主イエスが言われているのは、栄養学のことでありません。わたしたちの対人関係のことです。「**人は皆、火で塩味を付けられる**」と言われました。対人関係でわたしたちに必要な「塩」は、いわば「火」によって得られるものとおっしゃるのです。

とは言え、その「火」は、主イエスがここで激しい言葉を用いて言われている「**地獄の消えない火**」のことではないでしょう。わたしたちは、地獄の業火や火災の火に頼らずとも、火を管理することを知っています。いいえ、わたしたちが受けるべき火を管理してくださるお方を知っています。

わたしたちが無意識のまま「**主を信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者**」になろうとしているとき、そのわたしたちに警告を与えてくださるお方です。わたしたちが自分をつまずかせているものが何であるのか、**片方の手か、片方の足か、片方の目か**、それに気づかせてくださるお方です。わたしたちが**命にあずかる者**になれるように、**神の国に入れる**ようにと、そのために何をすべきか、自分の何を切り捨てるべきか、問うてくださり、それを捨てていく勇気をお与えくださるお方です。

神を信じ、主イエスに従うと告白していても、「申命記」でモーセが告げているように、わたしたちの心は相変わらず、かたくなになるものであることを、忘れてはならないのでしょう。

「ヘブライ人への手紙」を記した使徒は、わたしたちが信仰者として歩んでいるならば、なお「天の父」から鍛えられなければならない、鍛錬を受けなければならない、と教えています。「信仰」は、何かの達観でも、達成でもありません。主イエスを「信仰の創始者、また完成者」（ヘブライ 12:2）として見つめながら、「平和を実現する神の子」として完成されることを願いながら、その途上を、「天の父」のお与えになられる鍛錬の道として行くことです。今日の自分は、昨日と同じではありません。今日の自分は、明日の自分とも同じではありません。捨てられ、鍛えられ、変えられていくのです。